

〔開催報告〕

林芙美子没後六十周年記念 朗読コンサートについて

藤川 功和

二〇一一年一月三日、第三回おのみち文学三昧において、尾道ゆかりの作家林芙美子（1903～1951）没後六十周年を記念した朗読コンサートを催した。芙美子にとって尾道は、十三歳から十九歳まで過ごすとともに、詩作に励む等、彼女の文才を育んだ地でもあった。

代表作「風琴と魚の町」が尾道を舞台にして描かれていることから、芙美子と尾道との所縁の深さが窺えよう。開催にあたって、朗読は本学日本文学科学生から有志を募った。また、ナレーションには本学卒業生で現在FMおのみちで活躍する藤井優希氏を、さらに、音楽の演奏は、広島交響楽団のチェロ奏者伊藤哲次氏、ピアノ奏者戸田真里氏をお招きした。当日の模様は、「広島県大学共同リポジトリ」に音声ファイルが登録されており、誰でもフリーで聞くことが出来る。中司弘子氏の指導の

下行われた数ヶ月の練習成果を遺憾なく發揮した学生諸氏の朗読と、作品の世界観と見事にマッチしたチェロとピアノの演奏を是非とも堪能されたい。

二〇一二年三月には芙美子の新出資料が発見された。芙美子が終戦前に疎開先の長野から親交のあった川端康成に宛てた書簡で、八月にはおのみち文学の館でも公開されている。今後も芙美子と尾道との所縁が途切れることはないであろう。

【当日のプログラム】

導入 『放浪記』

〔林芙美子 小説、童話、詩を辿る〕

① 『浮雲』（朗読 松本茜）

② 『晚菊』（朗読 宮本奈葉）

- ③ 『うず潮』(朗読 山本理紗)
 ④ 「絵本」(朗読 中村綾子)
 ⑤ 「お釈迦様」(朗読 大場愛)
 ⑥ 「蒼馬を見たり」(朗読 山本理紗)
 ⑦ 「掌草紙」(朗読 梶谷絵里)
 ⑧ 「ひかり」(朗読 宮本奈菜)
 『林芙美子と尾道』

- ⑨ 『風琴と魚の町』(朗読 梶谷絵里)
 ⑩ 『放浪記』(朗読 大場愛)

ナレーション―藤井優希(FMおのみち)

演奏者―チェロ 伊藤哲次(広島交響楽団)

ピアノ 戸田真里(広島交響楽団)

【朗読作品解説】

※当日配布のパンフレットより部分転載

〔小説〕

① 『浮雲』

『放浪記』より後の作品の集大成にして、林芙美子の最高傑作。敗戦後の混乱のなかで一人の男性との関係をめぐって主人公幸田ゆき子の愛欲の姿が描かれる。芙美子自身が「筋のない世界、説明のできない、小説の外側の小説」と語ったように、ここには、私たちの理性や常識では計り知れない、濃密で暗く重くそして虚無的であ

りながらなお確かな、生きる事の真実が、描かれている。

② 『晩菊』

昭和23年、芙美子四十五歳の時に発表した短編小説。舞台は、戦後の混乱期。主人公は、元芸者で今は金貸しなどをしながら、つましく生活している五十六歳のきんかつての恋人で元軍人の田部の来訪に最初は心がざわつくものの、彼が金の無心に来たとわかつて軽蔑する。かつての恋人の来訪というささやかな出来事を通して、一人の女性の「真の自立」を描いた芙美子の短編作品の傑作の一つ。

きんの「自立」をあざやかに描き出してみせたのが、田部が厠に立った隙に、田部の若かりし頃の写真を焼き、その紙の焼ける匂いを消す為にチーズを火にくべるという作品末尾で、そこには作品の冒頭にあった、かつての恋人来訪に揺れるきんとは対照的に、男を「軽蔑」しながら、逞しく生きてゆこうとする一人の女性の姿が描かれている。

③ 『うず潮』

昭和22年7月から11月まで、「毎日新聞」の朝刊に連載された、芙美子が終戦後最初に書いた新聞小説。戦争未亡人の千代子を軸に、千代子に想いを寄せる杉本晃吉、その晃吉を想う小谷仙子等、戦後社会でどう生きるべきか悩む人々の姿を描き出す。千代子も晃吉も生きること

にいわば無気力だったが、物語最終部では、自殺を仄めかし姿を消した晃吉の弟健二に会うべく、千代子の連れ子とともに初島に渡る。健二は自殺を思いとどまり、千代子も晃吉とともに生きてゆく決意をする場面で物語は閉じられていて、作品全体は「再生の物語」という捉え方が出来る。タイトルであり且つ作品の末尾に出てくる「うず潮」は、人間が容易に抗うことの出来ない「時」乃至は「運命」の象徴と捉えることが出来る。

〔詩〕

⑤ 「お釈迦様」 ⑥ 「蒼馬を見たり」

第一詩集『蒼馬を見たり』は、文学者としての生活がまだ安定しない昭和4年に刊行された。そのためか、世間への反抗、情熱、やるせない感情などが叫びのようにあふれ出した詩が多くみえる。「お釈迦様」「蒼馬を見たり」はその中の代表的作品。

⑦ 「掌(てのひら) 草紙」

第二詩集『面影』が刊行された昭和8年頃には芙美子は生活の安定を得る。そのこともあってか、この詩集にはしみじみした味わいの穏やかな作品が多くみえる。

⑧ 「ひかり」

芙美子の死後、遺稿の中から発見された「ひかり」は、童謡のように明るく澄んだ世界を描く。「ひかりのほうへ およいでいきたい くらいところから あかるいほ

うへ」

芙美子が生涯求め続けたものが、この一節に端的に表れているように思われる。芙美子は若いころ非常に苦しい生活を送ったにもかかわらず、あるいは苦しい生活を送ったからこそ、生きている幸福を生涯、全力で追及し続けた作家であった。その生命力、精神力が、今も私たちをひきつけてやまない、林芙美子の魅力の一つと言える。

〔小説〕

⑨ 『風琴と魚の町』

それまで詩を中心に書いていた芙美子が、小説に取り組むようになり、もともと初期に書いた短編が、「風琴と魚の町」である。自伝的要素が強く、芙美子本人を思わせる主人公の「まさこ」が、行商の旅をする両親に連れられて尾道に降り立ち、そのまま住みたいいきさつがつつられている。貧しい暮らしの哀愁とともに、それに負けない家族の絆が印象的で、芙美子の最高傑作と評価する人も多い。作中には当時の尾道の風景が、彼女の生き生きとした文章で描き出されている。

⑩ 『放浪記』

林芙美子の出世作で、最初『女人藝術』に昭和3年10月から翌々年10月まで20回連載された。好評を受け、昭和5年7月、改造社「新鋭文学叢書」として刊行され、

続く11月には『統放浪記』が同じ叢書として刊行される。芙美子の自伝的小説で、日付の入った日記体をとる。主人公の「私」が貧しさの中でも希望を捨てることなく逞しく生き抜いていく姿が生き生きと描かれる。

本作連載以前の芙美子は、大正11年、十九歳の時、女学校卒業直後、遊学中の恋人を頼って上京、下足番、女工、事務員・女給など職を転々とし、また義父や実母が上京してからは、その露天商を手伝っている。翌年には、卒業した恋人が帰郷して婚約を取り消される憂き目に合う。9月の関東大震災後は暫く尾道や四国に避難するが、翌大正13年には、親を残して東京に戻り、再び三人の生計を稼ぐ。この頃つけていた日記が『放浪記』の原型である。

昭和元年、二十三歳の時に、芙美子は画学生の手塚緑敏（まさはる）と結ばれる。『放浪記』の連載開始は、それから約2年後。本作には、芙美子が雑記帳に書き留めていた自作の詩も多くちりばめられていて、詩作が芙美子の原点であることが再確認できる。なお、著名な「海が見えた。海が見える…」という尾道のくだりは、第2部に登場する。

朗読箇所は、東京での生活に疲れた主人公が久々に故郷の尾道に帰り因島へ渡ろうとする、放浪記を代表する場面である。

〔付記〕

朗読コンサートは、広島県大学共同リポジトリ（HARP）に音声ファイルとして登録されています。HARPへは、尾道市立大学附属図書館のホームページからお進みいただけます。